



a man with NO mission ②

- 1 1 矢 (442字)
- 1 2 失敗一 (526字)
- 1 3 診察券 (775字)
- 1 4 ホームセンターで (826字)
- 1 5 同級生 (670字)
- 1 6 足し算 (163字)
- 1 7 失敗二 (768字)
- 1 8 デモ (331字)
- 1 9 葬儀 (1612字)
- 2 0 事件 (502字)

イラスト・いぬ36号

## 11 矢

ここ数日、男は体の不調を感じていた。どこがどうとほうまくなかったが全身を気だるさが覆っていた。商店街を歩いているときのことだった。男は偶然通りかかったクリーニング屋のウィンドウにふと目をやると、そこに映り込んだ己の姿を見て愕然とした。

頭に矢が刺さっていたのだ。

矢は右耳の後ろから左のこめかみ辺りに向かって斜めに貫通していた。先端には見るだけで痛みを感じるほどの鋭い矢尻がついていた。いつの間に刺さったのか、まったく身に覚えがなかった。いくら引き抜こうとしてもびくともしなかった。

男はうろたえて道行く人に助けを求めた。人々は男の頭に矢が刺さっていることに気がつくのと、指をさして嘲笑った。勝手に写真を撮るものもいた。石を投げってくるものもいた。男はしまいに泣き出してしまった。

男はその場から逃げ出そうとして、路上の段差につまずいて転んだ。人々が取り囲み、一斉に笑いを浴びせかけた。ある母親が「ああいう大人になったらダメよ」と言って子供の手を引いていった。男は道にうずくまって泣き続けた。

## 12 失敗一

長い下り坂の途中に、あまり見通しのきかない交差点があった。信号機はついてしたが交通量は少なく、歩行者や自転車は無視することも多かった。ときどき事故の起こる交差点だった。

男はいつもその坂道をブレーキをかけずに自転車で下った。目をつぶって交差点に突っ込んでいくのだ。悪ふざけなどではなかった。車に轢かれようとしていたのだ。死んで楽になりたい気持ちからしていることだった。

しかし、話はそう簡単には進まなかった。ひやりとすることは一度か二度あったが、ぴったりのタイミングで車が飛び出してくることはなかなか起きなかったのだ。

それでも幾度となく試みていると、ある日ついにそのときが来た。

男は耳をつんざくような車の急ブレーキ音に目をかっと見開いた。すぐ脇に乗用車が突っ込んできているのが目に入り、もう避けようがないことを悟った。

だがその瞬間、ある不吉な考えが男の脳裏をかすめたのである。

自分自身のスピードと車のスピード、車の形や直接ぶつかりそうな場所。もしかしたら一思いに死ねないのではないか……。

はたして、結果は男が予測した通りになった。男は一命をとりとめ、残りの一生を寝たきりで過ごすこととなった。死んで楽になりたい気持ちは、その後も少しも和らぐことがなかった。

### 13 診察券

男は朝早くから病院の待合で座っていた。昼休みが近づいても名前が呼ばれないので、何かおかしいと思った。診察券を出し忘れていたのだ。財布を探したがそこに診察券は入っていなかった。家に忘れてきたらしい。男はいったん取りに帰ることにした。

途中、男はそもそもなぜ病院に行ったのか思い出すことができないことに気がついた。何か心配事があったはずだった。考えているうちに、ふいに別のことを思い出した。朝家を出るとき、玄関の鍵をかけ忘れたのだ。近所で空き巣被害があったばかりだった。慌てて帰ると鍵はしっかり閉まっていた。勘違いだった。

部屋に入ると、男はあちこちの引き出しを開けて診察券を探した。心配事が何であったにしろ、それがなければ診てもらえないことに変わりはないのだ。

ところが、どこを探しても診察券は見つからなかった。そのうち、男は部屋が思っていた以上に汚く、不要なもので溢れていることに気がついた。男は一晩かけて部屋をきれいに片付けた。不要なものはすべてゴミに出した。

風呂場で汗を流しているとき、男は途中から診察券のことをすっかり忘れてしまっていたことに気がついた。その一方、そもそもなぜ病院で診てもらおうとしたのかは思い出せないままだった。

そのとき、どこからか笛を吹くような甲高い音が聞こえてきた。男はやかんを火にかけたままだったことを思い出し、慌てて風呂を出た。注ぎ口から水蒸気が勢いよく吹き出していた。火を止めると、中身はほとんど蒸発してしまっていた。

男はふいに診察券をしまった場所を思い出した。壁にぶら下げた安物のウォールポケットの中に入れたのだ。男は水滴をしたたらせながらそちらに足を踏み出し、はたと立ち止まった。それは前に住んでいた部屋で診察券をしまっていた場所だったのだ。

男は急いで体を拭いて服を着ると、以前住んでいた部屋がある街に出かけていった。

## 14 ホームセンターで

男が椅子に座って考えに耽っていると、警備員がやって来てそこに座るなどと言った。家具売り場で売り物の椅子に座っていたのだ。

男は、ホームセンターの中をほっつき歩きながら、何か新しい趣味を見つけなければと考えた。それは簡単に見つかるようなものではなかった。気がついてみると、男は店の売り物を手当たり次第ポケットに突っ込んでいた。そうしていると面倒なことを考えないで済むからだだった。

男は熱帯魚のコーナーでふと足を止めた。途端に、部屋に大きな水槽を置いて色とりどりの熱帯魚を飼うというイメージが思い浮かんだ。それを新たな趣味にしようと思っただが、水槽と魚それぞれの値段を見てすぐに諦めた。男はため息を一つつくと、店員が見ていない隙に水槽に手を突っ込んで熱帯魚を一匹捕まえた。

ホームセンターを出ようとしたところで、男は警備員に呼び止められた。椅子に座っていたところを注意してきた警備員だった。事務所に連れていかれると、男は店のマネージャーにポケットの中身をすべて出すよう迫られた。大人しく言われた通りにした。

蛍光マーカー、ダイヤル式チェーン、流しの三角コーナー用ネット、おがくず一袋、腕時計、フリスク、靴用の消臭剤などが次々に出てきた。最後に出てきたのは背中に青いラインが入った小さな熱帯魚だった。そのままポケットに放り込んでいたので呼吸ができずに死んでいた。

警備員が今にも殴りかからんばかりの勢いで男に悪態をついた。男は黙ってうなだれるしかなかった。マネージャーにねちねちと説教をされたあと、男はすべての商品を買収することを条件に解放された。

部屋に帰ると、男は調べられなかった上着の内ポケットから一匹の亀を取り出した。やはりあの熱帯魚コーナーで失敬したものだった。

男は畳に腹這いになり、亀と視線の高さを合わせた。あらぬ方を向いてじっと動かない

亀を見ていると、男は自分が昔からこの生き物を好きだったことを思い出した。男は亀を飼うことに決めた。それが新しい趣味となった。

## 15 同級生

男には高校を卒業してから十五年以上にわたって年賀状を交換している同級生がいた。特別親しい友人というわけではなかった。ただ同級生とだけ言うのがちょうどいいような間柄だった。

いつも向こうが元日に届くように年賀状をくれ、男がそれに返事を書いた。新年の挨拶に近況を一言添え、今年もよろしくと結ぶのが恒例だった。

今年もよろしくなどと言っても、会うことはおろか連絡を取ることもさえない。高校卒業以来、年賀状の交換以外のどんな関わりも持ったことがなかったのだ。

ある春の休日、男は都心の繁華街で偶然その同級生を見かけた。何しろ十数年ぶりのことだった。記憶にある姿とはだいぶ変わっていたが、それでも一目で彼と分かった。

同級生は、家電量販店の大きな紙袋をぶら下げていた。一人だった。高校時代に交流がなかったわけではないし、こんな偶然など滅多になかった。男は懐かしさを込めて同級生の名前を呼びかけた。

二、三度呼びかけて人波越しに手を振ると、同級生はようやく気づいて男の方を振り返った。目が合い、向こうも男を認めたことが分かった。

男は改めて手を高く振ると、そちらに足を踏み出した。ところが、相手はまるで何も見なかったかのようにすっと顔を背け、そのまま行ってしまったのだ。

男はもう一度同級生の名前を呼んだ。しかし、相手は聞こえないふりで遠ざかっていくばかりだった。男は軽い裏切りにあった気分での後ろ姿を見送った。

年が明けると、まるでそのときの出来事などなかったかのように、同級生から年賀状が来た。散々迷った挙げ句、男もまた何事もなかったようなふりで返事を出した。



## 16 足し算

恋人がふいに「 $7 + 5$ が好き」と言った。「 $8 + 9$ はちょっと苦手」

「 $7 + 5$ ね」男は言わんとすることが分かったというように応じた。「おれは $3 + 8$ もけっこう好き。 $6 + 7$ はなんか苦手だけど」

「 $3 + 8$ 、いいよね」

「いいよね。逆だとちょっと違うけど。 $8 + 3$ だと何て言うか……」

「分かる」

「あと $4 + 9$ とか？」

「それも好き」

「いいよね、 $4 + 9$ 」

## 17 失敗二

コーヒーの乗ったトレイを持って席に向かっていたとき、男はうっかりカップをひっくり返してしまった。

すぐに店員が飛んできて、こぼれたコーヒーを拭いてくれた。火傷をしなかったか、荷物は大丈夫だったかなどと気遣われ、男はすっかり申し訳ない気持ちになってしまった。

無料で入れ直すという店員の愛想のいい申し出を、男は頑なに固辞した。代わりに、罪滅ぼしの気持ちから、これまで一度も頼んだことのない生クリームがたっぷり乗った飲み物を新たに注文し直した。コーヒーの倍以上の値段だった。同じ店員がその飲み物を作ってくれた。

受け渡しのときだった。すっかり恐縮していた男は、指を滑らせてカップを掴みそこねてしまった。

カップはカウンターの縁に当たり、下に落ちていった。男は反射的に足を出した。衝撃を緩和するつもりが、むしろ蹴るような具合になってしまった。盛り上がった生クリームを覆うようについていたドーム状のふたが衝撃で弾け飛んだ。

プラスチックのカップは横にくるくる回転しながら放物線を描いて飛んでいった。ショーケースや近くの客たちにクリームを撒き散らした挙げ句、カップは鈍い音を立ててフロアに転がり落ちた。

男は言葉を失って立ち尽くした。カウンターの向こうの店員もまた身を乗り出したまま表情をなくしていた。店内の誰も何も言わなかった。足を出すなどという余計なことをしなければ、ふたのおかげで被害は最小限で済んだかもしれなかった。

男は、ちらりと伺った店員の顔にかすかな殺意が浮かんだのを見てとった。それ以上その場にいられなかった。男は一言も発しないまま、逃げるように店をあとにした。

それ以来、男は二度とその店に立ち寄ることはなかった。その店がある通りにも近寄らなかった。まもなく引っ越したのは、その店がある街に住んでいると気持ちが落ち着かなくて仕方ないからだった。

## 18 デモ

昼休みが終わろうとする頃、男は社員食堂のテレビで新宿でやっているというデモの中継を見かけた。中東で起きている内紛への、先進諸国の武力介入に対する抗議デモだった。

空爆で多くの市民が犠牲になっていることを知った男は、居ても立ってもいられない気持ちになり、自分も何か声をあげなければと会社を飛び出していった。

中継場所となっていた新宿東口に来てみると、デモはどこにも見当たらなかった。一万人を越える規模と言っていたからすぐに見つかるだろうと、男は通りを探して走り出した。

ところが、一時間かけてメインの通りを駆けずり回っても、デモの気配すら見つけることができなかった。「デモはどこでやってるんですか？」男はしまいに通行人に尋ねて回った。みんな眉をひそめて男を避けていった。

## 19 葬儀

友人が急逝し、男は葬儀に参列した。

坊主が読経している間、見知った顔が順々に焼香をあげていった。友人は内臓のどれかが機能不全になり死んだということだった。なぜか分からないが、男はそのことが次第におかしく思えてきて仕方がなかった。

弔問客用のパイプ椅子に座って順番を待つ間、男はうつむいて笑いをこらえた。落ち着いて深呼吸をしようとふと気を緩めたとき、鼻からぶふっと笑いが漏れた。小鼻がひくつき、残りの笑いが一気に噴出しそうになった。男は太ももにぐっと爪を立て、なんとか笑いを飲み込んだ。ぎりぎりセーフだった。

ふいに周りを見てはだめだということが意識にのぼった。いったん意識してしまうと、もう見ないではいられなかった。男は視線をあげて周りを見た。

儀式めいた雰囲気の中、黒い服の集団が沈んだ表情ですすり泣きをしていた。のっぺりした棺が供花に囲われ、坊主がまるでコントでも演じているかのような大袈裟な唸り声をあげていた。遺影の中の友人は、これでは死んでも仕方ないような半笑いの間抜け面をしていた。

男には、すべてがわざと自分を笑わせようとしているように思えた。そうとしか思えなかった。男は自分で自分の笑いを押さえ込むかのように椅子の上で体を右に左によじた。

焼香の順番が来ると、男はくしゃみと放屁を交互に我慢しているような歩き方で、一歩また一歩と前に進み出た。喉の辺りがやけにくすぐったかった。それが全身に広がって行くような気がした。

そうしてはだめだと分かっていたのに、男はまたしても顔をあげて正面の遺影を見た。まるで対比効果を狙ったかのような、バカ丸出しの顔をした友人の写真が飾られていた。

己に強く禁じれば禁じるほど笑えて仕方なかった。力を入れて口を閉じると、笑いはすべて鼻の穴から出ていった。大量の空気とともに鼻水の飛沫が飛んだ。男は唇まで垂れた鼻水をあわてて袖でぬぐった。

男はこの友人がある有名タレントの物真似を披露した過ぎし日のことを思い浮かべた。憐れと言ってもいいくらいのひどい出来だった。そのくせ本人は得意げなのだった。この友人はまったくどうしようもない愚か者だった。本当を言うと、心の内では友人だと思ったことなどなかった。借りた金を返さずに済んでラッキーだった。

男は友人が物真似をした有名タレントももはや故人となったことを思い返した。みんな死ぬのだなと思った。そう考えるとこれ以上ないおかしさが込み上げてきた。男が再び吹き出すと、焼香台の香木が四方八方に飛び散った。絵に描いたような見事な飛び散り方だった。それがいっそうおかしさを誘った。

もうだめだった。男はこれ以上の被害の拡大を防ごうとして、両手で顔を覆った。声をあげて泣き真似をすることで笑いを打ち消そうとしたが、自分自身以外の誰もごまかせていなかった。

男はおかしさにふるふると震える手を焼香台に伸ばしたが、そこにはもう香木は残っていなかった。自分がやったのだった。

男は、見れば笑いが込み上げてくると分かっている遺族たちの顔を絶対に見ないようにした。男は親族たちを見た。彼らが、まるで奇怪なものを見るような目で自分を見てくるその目つきがおかしくてたまらなかった。

堤防は崩れ去った。男はひいひい言いながら膝をつくと、そのまま床に身を投げ出した。床の上を転げ回りながら、まるで壊れた水道管のように笑った。

男は、それでもまだすべてを諦めていないかのように、這いつくばって席に戻った。その途中、込み上げた笑いを飲み込んだ拍子に屁を放った。濁音混じりの大きな音がして、男は思わず自分で笑った。

儀式は何事もなかったかのようにしめやかに進行した。男はその後もたびたび笑いの波

に襲われたが、椅子にしがみついて何とかこらえた。本当のところ、男はまったく笑いをこらえられていなかった。

参列者たちが送迎バスで火葬場に移動すると、男は遺族や他のものたちの手で火葬炉に放り込まれ、火をつけられた。

## 20 事件

ある日、男が住む部屋に突然警察が訪ねてきた。ドアの叩き方で警察だと分かった。男は要心してドアを開けなかった。

警察は近所で起きた強盗事件のことで話が聞きたいと言った。ドアを開けて顔を見せてほしいと言われると、男はこれは罠だと気がついた。

捕まるわけにはいかなかった。男は急いで窓のところへ行き、ベランダから逃げ出した。すでに警察が回り込んでいた。男は裏の畑であっけなく捕らえられると、車に押し込まれた。

警察は自分たちは警察のような格好をし、警察がやるようなことをしているが、本当は警察ではないのだと言った。男は自分がどこへ連れて行かれるのか知りたかった。警察のふりをした連中は教えられないと言った。なぜと問うと連中はむっつり黙り込んだ。

男はなぜ自分が捕まえられなければならないのか、その理由も知らなかった。

男の家の近所では、男が忽然と消えたことを誰も不審がらなかった。翌週、男の部屋に見ず知らずの男がやって来て、何食わぬ顔でそこに住みはじめた。近所の誰も、やはりこのことをおかしいと思わなかった。

その男は、部屋にあった家具や家電を自分のもののように使った。もといた男の痕跡はあっという間になくなってしまった。